

中学校国語教科書教材研究：  
「トロッコ」の考察を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009175">https://doi.org/10.14945/00009175</a>

## 中学校国語教科書教材研究

——「トロッコ」の考察を中心に——

Researching Ryunosuke Akutagawa  
through Japanese Language Teaching Materials “Torokko”

大塚 浩  
Hiroshi OHTSUKA

（平成26年10月2日受理）

### はじめに

芥川龍之介（1892～1927）は、明治25年3月1日、東京府東京市京橋区入舟町8丁目（現、東京都中央区明石町）に牛乳製造販売業を営む新原敏三、フクの長男として生まれる。大正4（1915）年、「帝国文学」に「羅生門」を発表、翌年の大正5（1916）年、第四次「新思潮」に「鼻」を掲載し、夏目漱石に賞賛されている。続いて、「芋粥」「戯作三昧」「奉教人の死」などを発表し、新奇的な題材観と優れた着想に富んだ作品を世に送り出した。芥川は、「今昔物語」や「宇治拾遺物語」などから題材を得た作品も多く、特に「今昔物語」の文学的価値を見いだした功績は大きい。

芥川龍之介の作品「トロッコ」は、大正11（1922）年3月1日発行の雑誌「大観」（実業之日本社）に発表されたのが初出である。翌年の大正12（1923）年5月18日に刊行された創作集『春服』に掲載されたものが初刊本となる。芥川の作品「トロッコ」は、発表以来数多くの書物に収められ、読み継がれてきている作品の一つである。

戦後中学校国語教科書教材としては、昭和25年版の秀英出版（中学2年生用）、三省堂出版（中学1年生用）、大修館書店（中学1年生用）をはじめとして、以後長年掲載され続けている。また、「トロッコ」は、中学校国語教科書教材としてだけでなく、小学校国語教科書教材としても、昭和36年から昭和39年まで光村図書（小学6年生用）に掲載されていた時期も存在していたのである。

芥川は、大正11年2月16日付佐佐木茂索宛ての書簡に、「拝啓 その後ボクも大芸先生にかぶれ今夜一夜に小説一篇を作つた 岡の為に大観へのせるつもり」と認めており、作品「トロッコ」の執筆過程を明らかにしている。

本稿では、「中学校国語教科書教材研究」の一環として、芥川龍之介の「トロッコ」の考究を通し、作品「トロッコ」の成立過程、登場人物としての土工たち、念願のトロッコ、良平の苛立ちと不安について考察を進めていくものとする。

### I. 作品「トロッコ」の成立過程

作品「トロッコ」成立過程については、石井茂が次のように述べている。<sup>1)</sup>

「書簡」の大正一一年の部に、佐佐木茂索宛のものがある。「拝啓 その後ボクも大芸先生にかぶれ、今夜一夜に小説一篇を作った。岡の為に大観へのせるつもり……」とある。（「大芸先生」一佐佐木茂索。「岡」一劇作家で芥川の親友岡栄一郎。「大観」一大隈重信主宰の総合雑誌、大正七・五～大正一一・四、評論の外に創作もあり、鷗外・藤村・日夏・八十なども執筆。）これによると芥川は大正一一年二月一六日の夜に、一夜で小説一篇を書き上げ、「大観」に載せる予定というのである。そこで「大観」の三月号を見ると、戯曲としての岡栄一郎の「意地」、小説として室生犀星の「心臓」と共に芥川の「トロッコ」が発表になっている。二月一六日の一夜で書き上げたのが「トロッコ」だということになる。

ここで石井は、芥川が自分と同じ夏目漱石門下の岡栄一郎のために、雑誌「大観」に作品「トロッコ」を寄稿した経緯が明らかになってきたと指摘している。確かに、岡栄一郎は当時、雑誌「大観」の編集に関わりがあったことも事実である。芥川の佐佐木茂索宛の書簡によれば、大正十一年二月一六日の夜、一夜で小説「トロッコ」を執筆し完成させたことになる。

作品「トロッコ」には、ベースとなる素材が存在している。その素材は、芥川龍之介に憧れて上京し、芥川と知遇を結んでいた神奈川県足柄郡吉浜（現、神奈川県足柄下郡湯河原町吉浜）出身の力石平蔵（平三）から得たものであった。

## II. 登場人物としての土工たち

作品「トロッコ」を読み進めていく上で、登場人物としての土工たちは、欠かすことのできない重要な人物として描かれている。ここでは、主人公である良平の前に現れる土工たちについて、順を追って見ていきたい。

作品「トロッコ」において最初に登場する土工たちは、良平が「毎日村外れへ、その工事を見物に行った」時に、「人手を借りずに」山の傾斜を下ってくるトロッコの上に乗って「土を積んだ後ろにたたずんでいる」という文章表現で描かれている。良平が、「土工になりたいと思うことがある。せめては一度でも土工と一緒に、トロッコへ乗りたいと思うこともある。」という思いを抱いている時、眺めている視線の先に存在する土工たちがそれである。

良平は、「あおるように車体が動いたり、土工のはんてんのすそがひらついたり、細い線路がしなったり」するトロッコに、羨望の眼差しを向けている。さらに、良平が「乗れないまでも、押すことさえできたら」と考えつつ見つめているのは、「トロッコは村外れの平地に来ると、自然とそこに止まってしまう。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いのか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。」件りの土工たちの姿である。

ここに描写されている「土工が二人」という言語表現は、ある特定された二人の土工ということではなく、この工事現場での仕事に従事している大勢の労働者たちの中の二人一組の土工たちの総称であろう。良平は、「毎日村外れへ、その工事を見物に」足繁く通っており、上述のトロッコの景色や場面は幾度となく見慣れているはずである。

二番目に登場する土工は、「二月の初旬」の夕方、良平が、「二つ下の弟」と「弟と同じ年の隣の子ども」との三人で「トロッコの置いてある村外れ」へ行き、トロッコを押したり乗ったりしている場面で登場する男である。良平たちに向かって「このやろう！ だれに断ってトロッコにさわった？」と怒鳴ったこの土工は、「古い印ばんでんに、季節外れの麦わら帽をかぶった、背の高い」一人の男であった。

三番目に登場する土工たちは、その後「十日余り」経過した二月中旬、良平が「昼過ぎの工事場」に行った時に目にする「土を積んだトロッコ」を押す土工たちである。この土工たちについては、本文ではこれ以上詳しく記されていない。

四番目に登場する土工たちは、二月中旬の同じ日の昼過ぎ、「まくら木を積んだトロッコが一両、これは本線になるはずの、太い線路を登って」きた二人の男たちである。この土工たちは、「二人とも若い男」であった。二人の若い土工の一方は、「しまのシャツを着」た男であり、もう一方は、「耳に巻きたばこを挟んだ」男である。良平は、この二人の若い土工たちを見た時から、「なんだか親しみやすいような気がした」と述べ、初めてその姿を認めた時から親近感を持っていたことがわかる。

### Ⅲ. 念願のトロッコ

#### (1) 有頂天の良平

良平は、枕木を積んだトロッコを押す二人の若い男たちに、親しみやすさを感じ近づいていく。本文では、次のように記している。<sup>2)</sup>

「この人たちならばしかられない。」——彼はそう思いながら、トロッコのそばへ駆けていった。

「おじさん。押してやろうか。」

その中の一人、——しまのシャツを着ている男は、うつむきにトロッコを押したまま、思ったとおり快い返事をした。

「おお、押してくよう。」

良平は二人の間に入ると、力いっぱい押し始めた。

「われはなかなか力があるな。」

他の一人、——耳に巻きたばこを挟んだ男も、こう良平を褒めてくれた。

そのうちに線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくともよい。」——良平は今にも言われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起こしたぎり、黙々と車を押し続けていた。良平はとうとうこらえきれずに、おずおずこんなことを尋ねてみた。

「いつまでも押していていい？」

「いいとも。」

二人は同時に返事をした。良平は、「優しい人たちだ。」と思った。

五、六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。そこには両側のみかん畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り道のほうがいい。いつまでも押させてくれるから。」——良平はそんなことを考えながら、全身でトロッコを押すようにした。

みかん畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。しまのシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ。」と言った。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、みかん畑のにおいをあおりながら、ひた滑りに線路を走り出した。「押すよりも乗るほうがずっといい。」——良平は羽織の風をはらませながら、あたりまえのことを考えた。「行きに押すところが多ければ、帰りにまた乗るところが多い。」——そう考えたりした。土工たちの了承を得て、一緒にトロッコを押す手伝いをし続ける良平の気持ちは、嬉々とし

ている。この時の良平は、何の気兼ねもなくトロッコを押ことが出来るという予てからの一つの願いだけでなく、土工たちと共にトロッコに乗るという二つ目の願いまでも叶えることができ、大きな満足感を抱いている。しかしながら、こうした有頂天になっている良平の気持ちが、次第に萎んでいく様子が描かれている。

当初、良平には、「急勾配」の登り坂であっても、「両側のみかん畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。」という景色や、下りでの「みかん畑のにおい」に意識を向け、それを感じることができる「心の余裕」が存在していた。また、徐々にトロッコを押す距離が長く若しくは押す回数が多くなっても、「行きに押すところが多ければ、帰りにまた乗るところが多い。」と前向きに考えたりもしている。

## (2) 重いトロッコ

しかし、「竹やぶのある所」を境に、前述したそのような楽しさや満足感で膨れ上がった良平の気持ちは、次第に減退し萎んでいくことになる。本文では、次のように記している。<sup>3)</sup>

竹やぶのある所へ来ると、トロッコは静かに走るのをやめた。三人はまた前のように、重いトロッコを押し始めた。竹やぶはいつか雑木林になった。つま先上がりのところどころには、赤さびの線路も見えないほど、落ち葉のたまっている場所もあった。その道をやっと登りきったら、今度は高いがけの向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、あまり遠く来すぎたことが、急にはっきりと感じられた。

三人はまたトロッコへ乗った。車は海を右にしなが、雑木の枝の下を走っていった。しかし良平はさっきのように、おもしろい気持にはなれなかった。「もう帰ってくればいい。」——彼はそうも念じてみた。が、行く所まで行き着かなければ、トロッコも彼らも帰れないことは、もちろん彼にもわかりきっていた。

これまで良平は、トロッコの重みについて本文中では何も形容していなかったが、この場面ではじめて「重いトロッコ」と表現している。これまでの良平は、トロッコを押すことが出来る喜びに浸っていたためか、トロッコの重さ自体に変わりがないのは当然のことではあるが、トロッコを「重いトロッコ」として実感していなかったのである。良平のトロッコを押す姿勢が、ここに来て初めて下向きになった瞬間である。

さらに「竹やぶ」の景色は、いつしか草木が一層生い茂っている「雑木林」へと姿を変えていった。トロッコの進む「線路」は、トロッコの往来が余り頻繁でないためか「赤さびの線路」となっている。しかも「つま先上がり」の上り勾配のその線路の上には、「赤さびの線路も見えないほど、落ち葉のたまっている場所もあった」のである。

トロッコを押しながら、「つま先上がり」の上り勾配を登ることでさえ難渋するのであろうが、その上「赤さびの線路も見えないほど」の落ち葉の堆積が障害物として溜っていると、より一層三人の押すトロッコの重みが増していたことが想像できる。本文中の「やっと」登り切ったという言語表現からも、この場面における三人の困難な状況と、登り切った安堵感を垣間見ることが出来よう。

そして、登り切った先に開けてきた視界が、「高いがけの向こうに、広々と薄ら寒い海」だったのである。この高い崖の向こうに広がる薄ら寒い海は、良平にとってはじめて見る風景であり、良平の脳裏では、「あまり遠く来すぎたことが、急にはっきりと」認識された景色でもあったのである。さらにトロッコは、「海を右にしなが、雑木の枝の下」を走り下っていく。この場面で良平は、「もう帰ってくればいい。」と心奥から念じ始めている。

#### IV. 良平の苛立ちと不安

良平は自らの意識の中で、「あまり遠くに来すぎたことが、急にはっきり」と自覚され、さらに「もう帰ってくればいい。」と念じている。土工たちがのんびりと休憩を取っている一軒目の茶店では、「一人いらいら」しながら、自分自身の焦りの気持ちを紛らわすために「トロッコの周りを回って」みたりしている。良平の頭の中は、「早く家へ帰りたい。」という気持ちで一杯になってしまっているのである。

しかしながら良平は、このような状況にあっても依然として、自ら家へ帰ろうとはしていない。そればかりか、土工たちに帰りのことについて尋ねることも無ければ、「早く帰ろうよ」と催促することもしてない。唯々、「早く家へ帰りたい」という思いを募らせていくばかりなのである。

##### (1) 何故良平は、自分から家に帰ろうとしなかったのか

では、何故良平は、これ程までに「早く家へ帰りたい」という思いを募らせていたのにも拘わらず、土工たちに一人で帰るよう通告されるまで自分から家へ帰ろうとしなかったのでしょうか。

吉田精一は、良平の気持ちについて、次のように述べている。<sup>4)</sup>

工夫たちから見れば、居ても居なくてもいいような存在である良平は、工夫たちが自分に好意を持ってくれているとひとりがてんし、「優しい人たちだ」とひそかに満足を味わっている。こういう満足を、彼に工夫たちも自分と同じように、もとの村へ帰るものと信じて疑わせない。日が暮れかかり、遠く来すぎたことが気がかりになっても、最終の宣告を聞かされるまでは、心のどこかに気強いところがあり、何かに紛らわせようとするゆとりもある。ところが、工夫の無造作な一言が、良平の気持ちにどんでん返しを食らわせる。

ここで吉田は、良平が「工夫たちが自分に好意を持ってくれているとひとりがてんし、『優しい人たちだ』とひそかに満足を味わっている」と捉えている。さらに、こうした良平の「満足を、彼に工夫たちも自分と同じように、もとの村へ帰るものと信じて疑わせない」として、良平は土工たちと一緒に帰れることに何の疑念も持っていなかったと主張している。

また、田島伸夫は、この場面の良平について、次のように述べている。<sup>5)</sup>

土工たちは、「帰ることばかり気にしていた」良平、「もう日が暮れる」と考え、「ほんやり腰かけていられなかった。トロッコの車輪をけってみたり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押してみたり、——そんなことに気持ちを紛らせていた。」という良平の心を察するどころか、逆に冷たく彼を突き放す。(中略) 土工たちはうわべはやさしく親切な人物に描かれている。トロッコを押させてくれたし駄菓子もくれた。良平を案じるようなことばもかけてくれた。ところが、そういうことばや行為を別にして、結果から考えてみるとどうだろう。良平の心には彼らといっしょに帰れるという前提があったからついてきたので、良平は土工たちが茶店から出れば家へ帰れると待ち続けていた。そういう信頼や期待を、彼らは一瞬のうちに裏切ってしまった。

田島は、工夫たちの言葉が「帰ることばかり気にし」て待ち続ける良平の心を「察するどころか、逆に冷たく突き放」ったと捉えている。さらに、「土工たちが茶店から出れば家へ帰れると待ち続け」た良平の「信頼や期待」を、土工たちは「裏切っ」たと把握しているのである。

さらに、田近洵一は、良平の心情について、次のように述べている。<sup>6)</sup>

良平はこういうことになろうとは夢にも考えていなかった。彼は必ず土工たちと同じ道を引き返すものと思いでいた。二人の土工はやさしく親切だった。彼らは最初から快く良平を受け入れてくれたし、「新聞紙に包んだ駄菓子」もくれた。最後まで思いやり深く、「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するぞら。」とあって、良平の身を案じてもくれた。思えば誠実な人がらのふたりであり、もちろん、何の悪意もあろうはずはなかったが、にもかかわらず、良平は、結果としてひとりほうり出されることになった。「われはもう帰んな。おれたちは今日は向こう泊まりだから。」ということばは、良平にとって冷たい他人のことばだったのである。いい人たちなのに、深いところでは結局他者でしかない—それは良平にとっては初めての他者経験だったともいえよう。

ここで田近も、「良平はこういうことになろうとは夢にも考えていなかった。」と述べ、土工たちの通告を想定外の発言と捉えている。なぜなら、良平は、「必ず土工たちと同じ道を引き返すものと思いでいた」からであると理由づけている。田近は、土工たちの通告を良平は「冷たい他人のことば」として受け、「いい人たちなのに、深いところでは結局他者でしかない」と把握している。

以上のように先行研究では、先の吉田や田島と同様に田近も、良平は「土工たちと一緒に帰れる」と信じていたという見解を示している。しかし、本当に良平は、土工たちと一緒に帰れると信じていたと言い切れるのであろうか。

## (2) 危機感の芽生え

作品本文では、薄ら寒い海の場面について、次のように記している。<sup>7)</sup>

その道をやっと登りきったら、今度は高いがけの向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、あまり遠く来すぎたことが、急にはっきりと感じられた。

三人はまたトロッコに乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走っていった。しかし良平はさっきのように、おもしろい気持ちにはなれなかった。「もう帰ってくればいい。」——彼はそうも念じてみた。が、行く所まで行き着かなければ、トロッコも彼らも帰れないことは、もちろん彼にもわかりきっていた。

良平は、この薄ら寒い海の場面において、自分自身がこれまで一度も足を踏み入れたことのない「あまり遠くに来すぎたこと」が、「急にはっきり」と理解できたのである。このときの良平は、今、自分のいる場所は、どこなのか、自分の村からどれ位の距離の地点であるのか、について思いを巡らしていたに相違ないであろう。この場面は、良平が自分の置かれている位置を極めて客観的に見つめ、自分自身と向き合った場面である。まさに、良平が、「危機感の芽生え」を実感した瞬間であると考えられる。

この時の良平の心の中は、決して、トロッコを継続的に押すこと乃至乗ることが出来ることへの期待感と満足感で埋め尽くされていたわけではない。良平の頭の中には、余りにも「遠く来すぎたこと」が、「はっきりと」明確に感じられているため、心ここにあらずという心持ちで、機械的にトロッコを押している乃至乗っているという状態であろう。こうした良平の心理状態は、「さっきのように、おもしろい気持ちにはなれなかった。」という言語表現からも看取することが出来る。

良平は、続けて「『もう帰ってくればいい。』——彼はそうも念じてみた。」と心境を吐露している。良平は、「そうも思ってみた。」のではなく「そうも念じてみた。」のである。良平の気持ちを考えると、「もう帰ってくればいい。」と心の中で「そうも思ってみた。」とする

ことはむしろ自然な筆致であろう。しかし、作者である芥川は、「もう帰ってくればいい。」と心の中で「それも念じてみた。」という表現にしている。良平は、どうか「もう帰ってくればいい。」と心底から神仏に念じているのである。こうした芥川の筆致は、この場面の良平の気持ちを考察する上で、留意すべき言語表現の一つであると言えよう。

### (3) 土工たちへの懐疑心

作品本文では、一軒目の茶店の場面について、次のように記している。<sup>8)</sup>

その次に車の止まったのは、切りくずした山を背負っている、わら屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へ入ると、乳飲み子をおぶったかみさんを相手に、悠々と茶などを飲み始めた。良平は一人いらいらしながら、トロッコの周りを回ってみた。トロッコには頑丈な車台の板に、跳ね返った泥が乾いていた。

しばらくののち茶店を出てきしなに、巻きたばこを耳に挟んだ男は、(その時はもう挟んでいなかったが)トロッコのそばにいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「ありがとう。」と言った。が、すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口に入れた。菓子には新聞紙にあっただけの、石油のにおいがしみついていた。

三人はトロッコを押しながらゆるい傾斜を登っていった。良平は車に手を掛けていても、心はほかのことを考えていた。

ここで土工たちは、茶店に入って「乳飲み子をおぶったかみさん」を相手にしながら、「悠々と茶などを飲み始め」ている。つまり、二人の土工たちは、良平を一人トロッコの傍らに残して、茶店の女将さんと雑談を交わしながら、悠然とお茶を啜っているのである。良平は、茶店に入り悠然とお茶を飲み始めた土工たちの姿を眺めながら、居ても立ってもいられなくなり、「一人いらいらしながら、トロッコの周りを回って」みたりしているのである。

もし、この時良平が、土工たちと一緒に帰ることが出来ると信じていたのであれば、どんなに遠くまで来ようとも、どんなに暗くならうとも、不安に感じたり、「一人いらいら」することはないのでないだろうか。どんなに遠くまで来ようとも、どんなに暗くならうとも、多少帰宅時刻が遅れることはあるかもしれぬが、土工たちと三人で帰るのであるから、本来安心であるはずである。

では、何故良平は、「一人いらいら」していたのであろうか。良平は、もしかするとこの土工たちは、自分と同じ方向へは帰らないのではないか、という疑念を持ち始めていたのではないだろうか。

作品本文のこの場面の描写では、良平は、「トロッコの周りを回っていた。」のではなく、「トロッコの周りを回ってみた。」と表現されている。前者は、良平が、「一人いらいらしながら」、無意識のうちの行動として知らず知らずに「トロッコの周りを回っていた。」と解することができるが、後者は、「一人いらいらしながら」、その自分自身の苛立ちが他者に伝わるように、意識的に「トロッコの周りを回ってみた」と解することができる。つまり良平は、自分自身の苛立ちを他者である土工たちに伝えようと、敢えて意識的に「一人いらいらしながら、トロッコの周りを回ってみた。」という行動をとったのではないだろうか。

西垣勤は、藁屋根の茶店の場面について、次のように述べている。<sup>9)</sup>

「切り崩した山を背負っている、わら屋根の茶店」で、土工たちが「悠々と茶などを飲むのを、良平は「いらいらしながら」待つ。土工たちは、良平を茶店に入れぬ。仲間扱い



していないのである。もう厄介だから帰さなくてはと思っているのかもしれない。それでも土工の一人は、「新聞紙に包んだ駄菓子をくれ」るが、良平は冷淡に礼を言っしまい、済まないと思直して、菓子の一つを口に入れる。良平のセンシブルな感覚をよく示しているところだろう。

ここで西垣は、藁屋根の茶店に入ってお茶を飲むのは土工たち二人のみであり、「土工たちは、良平を茶店に入れぬ。仲間扱いしていないのである。」と述べている。確かに、これまで懸命に重いトロッコを押す手伝いをしてきている良平に対する、慰労の気持ちが表出されていない。土工たちは、枕木を積んだトロッコの運搬という重労働の後であり、自分たちが喉の渇きを覚えるのであれば、当然子供である良平も喉が渇いていることは承知のはずである。土工たちは、良平に休めの一言を掛けることもなければ、自分たちが茶店で休憩することを良平に断るわけでもない。土工たちは、良平を茶店に誘うことさえもせず、身勝手に二人で悠然とお茶を飲みながら休憩をとっている。また、良平を一人待たせておきながら、休憩を早々に切り上げてくる素振りを微塵も見せてはいない。

こうした土工たちの一連の行動は、些かも優しいとは言い難い。土工たちは、良平の存在を無視し、自分たちの予定を優先した行動をとっていることは確かである。先に述べたように良平は、自分自身の苛立ちを土工たちに伝わるように、「一人いらいらしながら、トロッコの周りを回ってみた。」という意識的なアピール行動を取っている。これは、自分の苛立ちを落ち着かせるための単なる行動ではないと考える。

一方、土工たち二人は、こうした良平の行動に気付かなかったのであろうか。藁屋根の茶店の女将さんの目にも、場違いな八歳の良平の姿は奇異に映るであろうし、良平の存在を全く認識していないとは考えにくい。また、土工たちと女将さんの会話に中にも良平のことが話題になったかもしれない。なぜなら、「一人いらいらしながら、トロッコの周りを回ってみた。」という良平の行動は、茶店の土工と女将さんの視線を意識した意図的なものであったからである。

巻きたばこを耳に挟んだ男は、「茶店を出てきしなに」、トロッコのそばにいる良平に対し、新聞紙に包んだ駄菓子をくれている。巻きたばこの男は、茶店から出るとすぐに良平に駄菓子を渡している様子から、偶然駄菓子をくれたのではなく、前もって良平に駄菓子をやるうと心積もりをした上での所作であったことが理解できる。「新聞紙に包んだ駄菓子」という表現からは、土工たちが休憩の間に茶店の女将に駄菓子を入れた「包み」を用意してもらったとも考えられるからである。こうした行為は、これまで手伝いをしてきてくれた良平に対する感謝の意であると解することができるが、と同時にこの駄菓子をやるからここで「厄介払い」をするサインであったとも考えられよう。

#### (4) 良平の焦り

藁屋根の茶店を出発した土工と良平の三人は、さらにトロッコを押しながら緩い傾斜を登っていく。本文では、次のように記している。<sup>10)</sup>

三人はトロッコを押しながらゆるい傾斜を登っていった。良平は車に手を掛けていても、心はほかのことを考えていた。

その坂を向こうへ下りきると、また同じような茶店があった。土工たちがその中に入ったあと、良平はトロッコに腰を掛けながら、帰ることばかり気にしていた。茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる。」——彼はそう考えると、ほんやり腰掛けてもいられなかった。トロッコの車輪をけってみたり、一人では動かないのを

承知しながらうんうんそれを押しを試みたり、——そんなことに気持ちをまぎらせていた。

良平は、藁屋根の茶店を出てトロッコを押しながら、「心はほかのことを考えていた」のである。では、何を考えていたのであろうか。土工たちは、依然としてトロッコを押しながら先へ先へと進もうとしている。坂を向こうへ下りきると、また同じような茶店があり土工たちはその中に入って行った。

二軒目の茶屋の前で、再度一人きりで残された良平は、「トロッコに腰を掛け」ながら、「帰ることばかりを気にしてい」るのである。二軒目の茶店に入った後の二人の土工たちの様子は、詳しく描写されてはいない。先の一軒目の茶店では、「乳飲み子をおぶった」女将さんを相手に、「悠々と茶などを飲み始めた」土工たちの姿が、トロッコの傍らで待つ良平の視点で細かく描写されていたが、この二軒目の茶店の土工たちの様子は、物理的に良平の位置から窺い知ることができないがためか、一切描写されていない。トロッコの傍らに腰掛ける良平の位置からでは、実際に茶屋の中を見通すことができないのかもしれない。トロッコに腰掛けながら良平は、茶店の前に立つ花の咲いた梅に射す「西日の光が消えかかっている」ことを漠として見つめている。そして、「もう日が暮れる。」と深奥から実感するのである。

良平は、ただ漫然と腰掛けていることができずに、立ち上がって「トロッコの車輪をけってみたり」、「一人では動かないのを承知」で、トロッコを「うんうん押しを試みたり」して気を紛らわせているしかないのである。この時点でも良平は、一人で家へ帰ろうとしていない。良平の脳裏では、土工たちと一緒に帰れないという可能性が次第次第に高くなってきているのではないだろうか。それと同時に、土工たちと一緒に帰れないことを無意識のうちに打ち消したい、受け入れたくないという思いのもう一人の良平が、良平自身の中に存在していたと考える。

良平は、土工たちと一緒に帰れないかもしれないという危惧が自分自身の中で徐々に膨らみ、それがもし現実となった時に、これから自分自身が遭遇するであろうと思われる苛酷な行く末を思い浮かべるときに、そうしたことはどうか起こらないで欲しいという思いで、必死になってそれを否定し、またそれを遠ざけようとしていたのではないだろうか。

そのような状態にあったからこそ良平は、これまで幾度も機会があったのにも拘わらず、トロッコの行き先や帰り路のことについて、土工たちに尋ねることが出来なかったのではないか。もし自分が土工たちに行き先や帰り路のことを尋ねてしまったならば、土工たちが自分自身と一緒に帰らないことが明瞭判明になることを避けたいがために、問うてみたい・聞いてみたい思いを必死に抑え込みながら、その問いを無意識のうちに否定してきたのである。もう少し踏み込んで考えると、良平は、意識的にその問いを打ち消し、飲み込んできていたのかもしれない。

つまり、良平は、土工たちと一緒に帰ることが出来ないということが現実となってしまうことに対する恐怖心ゆえに、不安が募っても焦りが生じても、決して土工たちに行き先や帰り路のことを問いかけたりすることが出来なかったのではないかと考えるのである。

## V. 終わりに

本稿では、「中学校国語教科書教材研究」の一環として、作品「トロッコ」の成立過程、登場人物としての土工たち、念願のトロッコ、良平の苛立ちと不安について考察してきた。今後の研究では、さらに以下の点を中心に考察を進めていきたい。

### 1. 土工たちの通告について

2、良平の決断について

3、帰路の試練について

#### 【引用文献】

- 1) 石井茂稿「芥川龍之介の小説『トロッコ』の基礎的研究—素材提供者力石力蔵をめぐって—」『横浜国立大学人文紀要 第二類 語学・文学』第28輯、横浜国立大学教育学部、昭和55（1980）年11月29日、1頁
- 2) 芥川龍之介作「トロッコ」『現代の国語1』、株式会社三省堂、平成14（2002）年2月25日、156～158頁
- 3) 上掲書、159頁
- 4) 吉田精一著『近代文学注釈体系芥川龍之介』有精堂、昭和38（1963）年5月30日、345頁
- 5) 田島伸夫著『文学の世界に目をひらく読みの授業』、一光社、昭和57（1982）年7月10日、106頁
- 6) 田近洵一稿「指導過程」、『文学教育実践講座〔中学校篇〕』、有信堂、昭和45（1970）年6月30日、115頁
- 7) 前掲2)の文献、159～160頁
- 8) 前掲2)の文献、160頁
- 9) 西垣勤稿「『トロッコ』論」『芥川龍之介作品論集成 第五卷蜘蛛の糸 児童文学の世界』、翰林書房、平成11（1999）年7月28日、232頁
- 10) 前掲2)の文献、160～161頁

## A Researching Ryunosuke Akutagawa through Japanese Language Teaching Materials “Torokko”

Hiroshi OHTSUKA

(Received October 2, 2014)

### Abstract

Ryunosuke AKUTAGAWA (1892-1927) was born in Tokyo Prefecture. The first recorded example of his work *Torokko* ran in March 1922 edition of *Taikan*. Later, in May 1923, he had his first work, *Torokko* officially published. A fuller, revised version *Torokko* was included.

The main issues examined in the research of Ryusuke Akutagawa, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of *Torokko* and those in the school textbook version.

The textbook version of *Torokko* was published by *Syuuuei Tosho Publication* in 1950. It was selected for the first time as a teaching material for students aged 14 years or older. Since 1950, the textbook has been reprinted a number of times.